

‘ο κόσμος, αλλοίωσις. ο βίος, υπόληψις.’

18号 1990.11.17

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: ブルーハーツ 1990.11.7 横浜アリーナ



情熱の薔薇 作詞・作曲 甲本ヒロト

永遠なか本当か 時の流れは続くのか
いつまで経っても変わらない そんな物あるだろうか
見てきた物や聞いた事 いままで覚えた全部
でたためだったら面白い そんな気持ち分かるでしょ

答えはきっと奥の方 心のずっと奥の方
涙はそこからやってくる 心のずっと奥の方

なるべく小さな幸せと なるべく小さな不幸せ
なるべくいっしょに集めよう そんな気持ち分かるでしょ

情熱の真っ赤な薔薇を 胸に咲かせよう
花瓶に水をあげよう 心のずっと奥の方

アンコールは楽しかった。「電光石火」、「リンダリンダ」、よかった。とくに「僕の右手を知らせませんか」にうたれた。この瞬間を生きていられてしめさせたと思った。歌っているヒロトも大変な思いをして、この瞬間を獲得したにちがいない。ブラスバンドが入って最後の曲になってライブがおわった。拍手!

ブルーハーツはすごい。すばらしい明るさ。ことばがやさしい。エフトウシエンゴのことがすぐに思いうかんで、本棚から「早すぎる自叙伝」をとり出した。「バービー・ヤール」の朗読を終えたときに、涙をうかべた花袋員がエフトウシエンゴに握手を求めてきたというところを読んで、やっぱりそうだ。ブルーハーツの歌は25年くらい前にエフトウシエンゴが詩の朗読をしたこととぴったり重なる。

これはブルーハーツをはじめてライブテープ(1986.11の豊島公会堂)で聴いたとき(1987.2)に書いたもの。そして先日、飯田利行の「大愚良寛の風光」を読んでいて下記の文章に出会った。「読む人」を「歌う人」に「読む人」を「歌う人」に置きかえたら、11月7日の横浜アリーナでのブルーハーツのライブにそっくりそのままあてはまる。ふんとしてブルーハーツは、詩である。

読む人は、結局読む人々が言わんとし言いえない、深部の構造下の情熱に角触れなければならぬ。しかも角触れた世界を、己のうちに溢れ出る言外情として読まなければならぬ。さらにその表現方法としては、読む人々が日常親しんでいる言語文字を巧みに詩的に昇華させて組み立てるすばさびに心得なければならぬ。かくして両者の間に、こまやかなコミュニケーションが成り立つ。漱石の詩も、良寛の詩も、ともにこのような条件を立て前としてできている。

飯田利行「大愚良寛の風光」より

POEM: エフトウシエンゴ「バービー・ヤール」(1961)

バービー・ヤールのうえには碑ひとつない
けわしい断崖だけがむきだしの墓石がわり
ぼくは そととする

ぼくはきょうにわかに年をとる
ユダヤ民族の歴史そのまの年に
思えばいまーぼくはユダヤ人ではないのか
古代エジプトの野をさまようぼく
はりつけの十字架に死んでいくぼく
そしていまだにぼくに残る釘の傷あと
思えばドレナスーあれは(ぼく)
俗物根性ーあれが(ぼく)の密告者、裁判官
鉄格子のなかのぼく

わなにかかった(ぼく)
追いたてられ

つばきされ

ののしられる(ぼく)
貴婦人たちはブリュッセル・レースを着かざり
わめきながらパサソルで笑く(ぼく)の顔を
思えば(ぼく)はベロストークの少年
血が流れ床ににじむ
居酒屋で(ぼく)は親方どものなぶりもの
ウソかき玉ねぎくさい連中に
長靴で蹴りだされかなくなだれる
ポグロムの徒に祈うとむなしい
がなりたてる声ー
「ユダヤをやっつけろ、ロシアを救え!」
店屋のおやじにぶちめされる(ぼく)の母親
おお、わがロシアの人民よ!
(ぼく)は矢口しているー

おまえはほんとにインターナショナルなのに
午のよれた者たちがしきりに
おまえの清純な名をかたったのだと
ぼくはわが国土の善良さを失っている
なんたる卑劣

臍面もなく
反ユダヤ主義者が自ら美名をかたるとは
《ロシア人民同盟》などど!
思えば

(ぼく)はアンネ・フランク
芽ぶく四月の小枝のように
すきとおる少女
そしてわたしも恋をする
なんのこともいりほしない
おたがいに見つめ合っていただけ
みえるもの、香りのきけるものはほんのわずか!
木々のみどりもだめ

青空もだめ
でもたくさんでできることー
それはやさしく
おたがい旧い音屋で抱き合っていること
だれかくるわ?
たいじょうぶーあれは
春のどよめき
春がくるのさ
おいでこっちへ
早くくちびるを
ドアをこわしているのじゃない?
ちがうーそれは雪どけの流水の音

バービー・ヤールのうえ野の草はざわめく
立ち木のいかめしい目つきは
裁判官のきびしさ
こではすべてが黙然しつつ叫んでいる
帽子をぬぐと
(ぼく)は感じる
ゆっくりと白髪となるのを
そして(ぼく)自身
そのまま声のない叫びとなって
埋められた数々、数々の人びとに呼びかける
ぼくは
こで銃殺された年寄りのひとりびとり
ぼくは
こで銃殺された幼な子のひとりびとり
ぼくのかからだのなかのすべてか
そのことを忘れはしない!
《インターナショナル》の歌声も高鳴るがよい
地上にひとり生き残った反ユダヤ主義者が
永遠に葬りさられるそのときに
ユダヤの血は(ぼく)の血にない
だが(ぼく)は憎まれる頑迷な憎悪をこめて
すべての反ユダヤ主義者から
ユダヤ人のように
だからこそー
(ぼく)はほんとうのロシア人なのだ!

* キエフ近郊の地名。ドイツ軍がこゝでユダヤ人を大量に虐殺した。
** ポーランドの地名。